



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室

TEL&FAX. 029-853-6339 MAIL. office@joes.gr.jp



第26回大会ポスター会場の様子

特集 日本野外教育学会 第26回大会 報告

巻頭言 野外教育とセラピー 一辺縁に想いを寄せて一 吉松 梓	2
日本野外教育学会第26回大会 報告	3~11
日本野外教育学会第7回論文賞 報告	12~13
第6回日本野外教育学会研究集会 開催のご案内	14
10 th International Outdoor Education Research Conference 参加申込のお知らせ	15
書籍紹介 「キャンプセラピーの実践 一発達障害児の自己形成支援一」	16
事務局便り	17~18

野外教育とセラピー — 辺縁に想いを寄せて —

吉松 梓 (明治大学)

先日、心理臨床の学会で「辺縁から拓く心理臨床学」というテーマのシンポジウムに参加しました。登壇者は、佐渡(新潟)、北海道、沖縄でそれぞれ心理臨床実践をされている方々です。印象的だったのは、3名ともその土地・文化・風土の紹介から話を始めたということです。そして、日に焼けた引きこもりの事例(佐渡では、引きこもりで相談にきて「田んぼ」だけはやっている、佐渡の人にとって田んぼは「他存在」や「自然」ではなく、「自己」に入るのでは)などが紹介され、自然と人との境界の曖昧さについても議論が交わされました。人の心がそれだけ、その土地の自然と文化に密接に関わっているということでしょう。東京を日本の中心とするならば、これら新潟、北海道、沖縄などは地理的には辺縁にあたるかもしれません。このシンポジウムのテーマには、そもそも心理臨床は、辺縁(にある人・事)との臨床であるという想いが込められているようです。そして、指定討論者からは、現場という辺縁こそ、理論という中心より常に最先端なのでは…というコメントが寄せられました。つまり現場での辺縁での取り組みは、心理臨床学を広げていく力になるということです。この話を聞いて、私はふとエッジワークを連想しました。中心の Comfortable ゾーンにいるのは安心ですが、エッジというまさに辺縁でチャレンジしていくことで、可能性が広がるのだと。

思えば私は、マジョリティー(という中心)に対してマイノリティ(という辺縁)にいる方々とキャンプなどの自然体験活動をさせていただく機会が多くあります。そのきっかけを与えてくださったのは、本学会の現理事長でいらっしやる

坂本先生(筑波大学)です。当時、不登校や発達障がいの子供達と共にした冒険は、彼等と一緒に私自身のエッジにも向き合う、かけがえのない時間でした。近年は、ひとり親家庭の子供達と関わらせてもらうようになり、経済的な困難やトラウマなど様々な背景を抱える彼等にとって、果たしてキャンプなどの自然体験活動は何ができるのだろうか…と日々頭を悩ませています。

さて、話は変わりますが、昨年のおよそ半年間をかけて、「Outdoor Therapies (Harper & Dobud, 2021)」という洋書を、本学会員を含め関係の方々へと輪読させていただきました。



本書は、アドベンチャーセラピーから、動物介在療法、サーフセラピー、自然の中での感覚統合療法、園芸療法等、セラピーに関する様々なアウトドアアプローチを紹介しています。日本にいる我々にとっては未知の内容も多く、とても示唆に富んでおります(ぜひ一読をお勧めします!)。同時に驚いたのは、本書の中で、日本ではある意味

当たり前前に感じている人と自然との一体感や東洋的な思考、日本発祥の森林浴(森林療法)などが、見直され、紹介されているという点です。世界的な野外教育の流れの中では、アメリカやイギリスなどの中心に対して、日本は辺縁にあるといえるでしょう。しかしながら本書の購読を通して、中心の情報を敏感にキャッチすることももちろん重要ですが、辺縁で地道に実践をしていくことでもこの領域の発展に貢献できるのでは…と連想を膨らませております。これからも辺縁に想いを寄せながら、野外教育(学会)に少しでも寄与できるよう、精進していきたいと思っております。

参考文献

浅田剛正・梅川春樹・平安良次・平野直己・桑原智子・菊池安希子(2023): 辺縁から拓く心理臨床学—地域に根ざした臨床研究の方法論を模索する—、日本心理臨床学会第42回大会プログラム、20。

Harper, N. J., & Dobud, W. W. (2021): Outdoor therapies: An introduction to practices, possibilities, and critical perspectives. Routledge.

日本野外教育学会 第26回大会 報告

◆ 日本野外教育学会第26回大会 実行委員長挨拶

日本野外教育学会第26回大会を終えて

前田 和司（北海道教育大学）

2023年7月1日、2日の両日におきまして、日本野外教育学会第26回大会を、北海道教育大学岩見沢校を会場としまして開催させていただきました。5月頃まで、新型コロナウイルス感染の収束状況と国としての対応策の緩和措置の推移を見守りながらでしたが、完全に対面にて開催することが可能となり、大変うれしく思うとともに実行委員会一同胸をなでおろしつつ、皆様をお迎えすることができました。大会参加者は122名、自主企画シンポジウム、基調講演、実行委員会企画シンポジウム、企画委員会企画シンポジウム、口頭発表、ポスター発表、実践報告を行いました。

大会実行委員会を組織するにあたりましては、東北6県に相当する広さの北海道ですので、会場であります北海道教育大学岩見沢校と比較的近く、つながりもある北翔大学生涯スポーツ学部、北翔大学教育文化学部、國學院大学北海道短期大学部、国立日高青少年自然の家、国立大雪青少年交流の家、NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらすの教員、職員で構成いたしました。日頃から実践や研究上のつながりがあり、大会のテーマであります「北海道の大自然を感じ、未来を見据え、これからの野外教育を考える」ことを常日頃強く意識して取り組んでいるメンバーであります。

基調講演は、北海道大学森林園ステーション苫小牧研究林の林長であります中村誠宏先生にお願いいたしました。講演のタイトルは「気候変動や生物多様性の視点から、北海道の森林の『いま』と『これから』を知る」です。中村先生は生態学、それも群衆生態学を専門にご研究されています。気候変動や、生物多様性の縮小の影響を、昆虫と植物の相互作用に焦点を当てつつ分析されています。大会前日のエクスカージョンでも、苫小牧研究林へのフィールドトリップを案内していただき、研究の概要について説明していただきました。今回生態学プロパーの研究者に基調講演をお願いしたのは、私たちが野外教育を実践する場所（アウトドア・フィールド）には、自然科学的な物語や、社会的、政治的、経済的、文化的な様々な物語が埋め込まれています。自然科学ではどのようにそれらの場所が語られているのか、非常に関心があったからです。

大会実行委員会企画シンポジウムは、「野外教育のポテンシ

ャルと可能性～実践での取り組みから～」と題しまして、札幌新陽高等学校校長・ウィーシュタインズ株式会社代表取締役の赤司展子氏、学校法人フレンド

恵学園理事長の伊原鎮氏、十勝岳温泉株式会社代表取締役の青野範子氏の3名のシンポジストをお迎えしました。コーディネーターは北海道教育大学岩見沢校の濱谷 弘志 先生です。

赤司氏からは、札幌新陽高校で科目横断的に行われているアウトドア探求について紹介していただきました。自然を教育に取り入れることの重要性和、その意味での北海道の優位性、そこでの「オーセンティック」「多様性」「偶発性」「探求・創造」「自己決定」の経験と生徒たちの出会いの創造についてお話しいただきました。伊原氏は浦河町で幼保連携型認定こども園「浦河フレンド森のようちえん」にて、自然豊かな環境を活かした教育を実践されています。現在の子育て世代が求める「良い教育」「安全安心」「自然豊かな場所」を浦河で実現する取り組みをご紹介いただきました。青野氏は十勝岳の中腹にある凌雲閣という温泉旅館を経営されています。凌雲閣は多くの登山ファン、山スキーファンがお世話になったところだと思います。ジオパークに指定されることで十勝岳エリアの価値が高まる中、環境整備やガイドなどの連携をいかに作り出し、コーディネートしていくかが課題であるというご報告でした。フロアからも多くの質問やコメントが出され、活発なディスカッションとなりました。

最後になりますが、第26回大会に参加された皆様には心よりお礼申し上げます。7月初旬に開催しましたのは、北海道らしさをもっとも感じていただける季節だからということもございましたが、学期の途中で授業のある時期でもありましたので、十分に北海道を満喫していただけたかどうか。また基調講演やシンポジウムをお引き受けいただいた先生方、大会運営をサポートしてくれた学生スタッフの諸君には、実行委員会を代表しまして、心より感謝いたします。



◆ 基調講演

「気候変動や生物多様性の視点から、北海道の森林の『いま』と『これから』を知る」

中村 誠宏（北海道大学森林圏ステーション苫小牧研究林長）

日本野外教育学会第26回大会の基調講演は、北海道大学森林圏ステーション苫小牧研究林の林長の中村誠宏先生にお願いしました。タイトルは「気候変動や生物多様性の視点から、北海道の森林の『いま』と『これから』を知る」です。中村先生の専門は群衆生態学であり、温暖化や生物多様性の変化が、植物と昆虫の関係にどのように影響するかについて主に研究されています。勤務地の苫小牧演習林は、ヒグマ、エゾシカなど様々な動物や、林内の川には絶滅危惧種であるイトウが生息する森林であり、冬は雪上車や山スキーで山の中に分け入って森の研究を行っておられます。以下、中村先生の基調講演の概要をまとめてみたいと思います。

広大な研究林における生態学研究の方法は、大きく3つあります。1つは「長期観察」、2つ目が「広域観察」、そして3つ目が「野外操作実験」です。しかし、長期観察も広域観察もパターンしか明らかにならないため、メカニズムを見極める方法として、生態系に何らかの操作を加える「操作実験」を行います。たとえば川の上にビニールハウスをたてて、川と森のつながりを分断します。森は川に落ち葉を落とすことで水生昆虫にエサを供給し、水生昆虫が増えると魚が増えます。また、水生昆虫が羽化すると森のクモや鳥のエサになります。このように川と森はつながっているのですが、それを分断することで川と森との関係がいかに変わるのかを見ていくのです。

次に人間活動の生態系へのインパクトについてですが、世界の平均気温は今後100年間で1.4~5.8℃上昇すると言われています。ナガサキアゲハは、1945年から2000年までの間に生息分布がかなり北上しました。冬の気温上昇によって越冬が可能になったためです。しかし、昆虫の場合、昆虫が食べる植物もセットにして考える必要があります。苫小牧研究林では地面を温めるという野外操作実験を行い、土壌の温暖化によるミズナラの変化と食害昆虫への影響を明らかにしました。温度を5℃上げて葉の厚さや窒素量、フェノールの量などを見るのです。フェノールは昆虫に食べられないように木がつくり出す防御物質です。その結果、葉の中のフェノールが増えていることがわかりました。そして、土壌を温めたミズナラは食害度が下がっていました。温暖化すると昆虫が北上し、北海道での食害が増えると考えられていますが、植物と昆虫の関係でみていくと、温暖化によってミズナラは



防御物質を増やして食害度を下げるため、たとえ温暖化が進んでも、北海道のミズナラの森ならば昆虫によるひどい被害が増えることはないということがわかったのです。

また生物多様性には遺伝子の多様性があります。皆伐などで人が森を分断すると遺伝子の交流がなくなります。すると近交弱勢が起こったりして、その種の集団の遺伝的な多様性が下がってしまい、種の絶滅が起こります。この遺伝子の多様性の低下が植物と昆虫の関係に及ぼす影響をみる操作実験では、遺伝的多様性が高くなるほど、アブラムシなどの吸収性昆虫の被害が少なくなることがわかりました。多様な種が周りであることで、昆虫がターゲットにする植物が隠れて見えにくくなったり、においが混ざり合っただけで気づきにくくなるのです。

さらに最近では、生物多様性が高い森を復元する技術の開発を行っています。道路の法面を森の表土を皮膚移植するように張り付けると、そこはももとの草本がかなりきれいに戻ります。このようにすると、外来種が法面に入りにくくなります。また間伐の幅によって針葉樹の人工林に周囲の天然林が入り込みやすい条件を調べています。広葉樹が入り込むことで生物多様性が高まり、昨今問題となっている防災機能や水源関与機能を回復することが可能なのです。

以上、中村先生の講演を伺いながら感じたのは、生態学研究は自然のフィールドに身を置いて、まさに体を張って生態系の構造や変化を理解しようとする学問だということです。そして、自然を守るということは必ずしも手付かずのままにすることではなく、状況によっては積極的に人の手で自然の

状態や量を修復、創造していくことが求められているということでした。私たちが野外教育の参加者たちに提供するプログラムや語りは、そのフィールドをどのように認識しているのかに左右されます。今回の基調講演を伺いながら、中村先

生のような生態学的研究の知見を自らの野外教育の基礎に組み込んでいく必要性を強く感じました。

報告者：前田 和司（北海道教育大学）

◆ 実行委員会企画シンポジウム

「野外教育のポテンシャルと可能性～実践での取組から～」

シンポジスト：赤司 展子（札幌新陽高校・ウィーシュータインズ（株））

シンポジスト：井原 鎮（学校法人フレンド恵学園）

シンポジスト：青野 範子（十勝岳温泉（株））

コーディネーター：濱谷 弘志（北海道教育大学）

昨年、日本野外教育学会が文部科学大臣に政策提言を手交したことを受け、本大会の実行委員会シンポジウムは、野外教育をあらゆる分野に広げることが目的として企画し、学校教育の取り組みより赤司展子氏、幼児保育の取組より井原鎮氏、エコツーリズムの取り組みより青野範子氏の3名を招き、それぞれの分野での実践から話をさせていただきました。



最初に登壇した赤司氏は実践事例として、建築をベースにしたSTEAMプログラムについて紹介され、小学生が建築家や林業関係者、大工といった学外の方と一緒にツリーハウスを作る中で、好奇心や環境への関心、想像力、問題解決力が育まれることを紹介されました。さらに、勤務校で行われている野外教育プログラムと「アウトドア探求」という授業について紹介され、生徒のライフスキルの獲得や非認知能力への可能性について述べられました。今後に向けて、北海道の恵まれた自然を教育に活かす有効性と生徒の学習環境の構築の重要性について述べられ、「多様性」「探求・創造」「自

己決定」などのキーワードが挙げられました。

井原氏は、子育て世代が求めるニーズとして「自然が豊か」「安全安心」「良い教育」を挙げ、それに最適であるのが環境を活かした教育である「森のようちえん」であり、さらに地域活性化にもつながる可能性を紹介されました。また、現在の園での取り組みとして、地域の方を交えての森の整備や馬の飼育など、多様性という側面から子どもたちにとって重要な環境づくりを述べられました。

青野氏は、自身が経営される標高1,300Mに位置する十勝岳温泉での自然環境について紹介されました。夏は登山、ハイキング、高山植物、自転車のヒルクライム、冬はスノーハイク、バックカントリーツアーなどが人気で、インバウンドも含め多くの方が施設をベースに自然体験を楽しみに来ており、周辺がジオパークに認定されたことで、さらに多くの方が訪れることなどを述べられました。その要因として、その場所でしかできない体験が多くの方に魅力となっており、喜ばれていると分析されていました。

その後のディスカッションでは、野外教育を取り入れる強みや、今後の活用をテーマに意見を述べていただいたところ、それぞれから「生きる力」「自然の中で遊ぶ経験」「再発見」といったキーワードが挙げられました。続いて、実践者の立場から学会の研究者に望まれることをお聞きしたところ、3名とも野外教育に関する研究や調査結果について、あまり認知されておらず、その効果や調査結果などのエビデンスを求められていることがわかりました。その後はフロアからの質問に答える時間が設けられました。

このディスカッションを通して、それぞれ立場が異なる実践現場で特色を活かした野外教育を提供されているものの、

その効果やエビデンスについては認知されておらず、実践現場から研究者に対してそのニーズが高いことが明らかとなりました。日本野外教育学会が政策提言で掲げた「野外教育を通じて子供の育ちを支える～すべての子供が豊かな自然体験を享受できる社会を目指して～」を実現するための課題

として、世の中でさらに野外教育を拡げるためには、今後、研究や調査結果について積極的に発信を行い、実践現場との連携を促すことが重要だと再確認する場となりました。

報告者：濱谷 弘志（北海道教育大学）

◆ 企画委員会企画シンポジウム

「体験からの学びを広げるために～北海道の取り組みから学ぶ～」

企画委員：高瀬 宏樹（国立中央青少年交流の家）

学会大会2日目（7月2日）に企画委員会シンポジウムとして、「体験からの学びを広げるために～北海道の取り組みを学ぶ」を開催しました。学会では昨年、文部科学大臣あてに政策提言を行いましたので、その次の動きを考えるため、今後の野外教育のキーワードとなる、「地域、学校、社会」という観点から、開催地である北海道での取り組みを参考にしたいと企画しました。社会（企業）の立場からは、北海道コカ・コーラボトリング株式会社の千葉洋平さん、地域の立場から厚真町教育委員会の斉藤烈さん、学校の立場から恵庭市立恵み野小学校の中田和彦さんの3名にシンポジストとしてご登壇いただきました。

北海道e-水プロジェクトと題し、北海道コカ・コーラボトリングは北海道環境財団と連携し、北海道の水環境を守る活動を通して次世代育成をしている団体に助成を行っています。補助金の配布にとどまらず、団体同士のネットワークづくりにも取り組まれています。厚真町教育委員会では、自ら

考え、決定し、行動する子どもを育てるため、「非日常を日常にする」学びの場づくりの取り組みをご紹介いただきました。恵み野小学校の中田和彦さんは、学校の現状を紹介しながら、子供に体験させたくてもなかなかできない苦勞を述べられ、教員の人材不足、学校の役割の変化を課題に挙げられました。

意見交換では、会場からの質問をきっかけに、「子どもが安心できる環境をどう大人が作っていくか」や、「本当に子どもがやりたい活動をどう支えるか」、「困ったときに相談しあえる関係」といった大切なキーワードがシンポジストから出て、そのために各者が協力し合えるプロジェクトがどんどん生まれそうで、とても良いやり取りの時間となりました。

今回は北海道の事例をもとに様々な可能性に触れましたが、今後、全国でどう取り組みを進めていくのか、どう野外教育を社会に根付かせていくのか検討を続けていけたらと思います。

◆ 自主企画シンポジウム

自然保育および一般的な幼児教育・保育の現状と保育者養成の課題

企画担当者・モデレーター・話題提供者：

田中 住幸（札幌大谷大学短期大学部）

話題提供者：陳 倩倩（はやきた子ども園）

中本 貴規（飯田短期大学）

酒井 俊郎（中部大学）

指定討論者：能條 歩（北海道教育大学）

本自主企画シンポジウムでは、「幼児教育」を話題とし、特に幼児期の自然保育の可能性について検討することを念頭

に実施しました。4人の話題提供者より、幼児の身体的特徴及び昨今の健康領域に関わる話題、自然保育の現状と課題、

北海道安平町の「はやきた子ども園」での自然保育実践についての紹介、保育者養成校での自然体験の実際が報告されました。その後、指定討論者の能條先生より、幼児期における自然体験の質の重要性、直接体験だからこそ得られる言語獲得、幼児教育の特色などについて発言をいただきました。本自主企画シンポジウムには野外教育現場で活躍されている方、ネイチャーガイド、大学教員、学生など20名ほどの皆様にご参加いただきました。質疑応答についても質問者それぞれの立場に照らし合わせた多角的な質問が多く、充実した時間となりました。

全国各地の自然保育の広がりや、以降も大きなものになることが予想されます。そして、本シンポジウムは自然保育推

進のきっかけに大きな期待を持つことができるものでした。ご参加くださいました皆様、会場をご用意くださいました実行委員会の皆さまにも感謝申し上げます。



日本の野外教育は世界のどこに立っているのか？

企画・話題提供：岡村 泰斗（株式会社 backcountry classroom）

林 綾子（びわこ成蹊スポーツ大学）

このワークショップのゴールは、我が国でスタンダードが成熟しない要因を理解し、さらに、世界各国の野外教育の成長ステージを事例的に理解した上で、我が国の成長段階を同定し、今後の進むべき方向のビジョンを得ることであった。まず初めに、野外指導者養成において、体験、テクニカルスキル、ティーチングが融合している海外のカリキュラムに対して、それぞれを強調するあまり、カリキュラム、人材育成がバラバラに行われている日本の現状を理解した。次に、サイモン（1997）により開発された冒険プログラムの10のルーブリックに基づき、各国の現状が紹介され、ピークに位置するオーストラリアの業界基準、成長段階に位置するシンガポールの自然学校、誕生段階に位置する中国の民間野外学校の事例が紹介された。また、同氏より2022年に行われた同調査との比較により、成長段階を一段階進めるために、約50年かかることが理解された。最後に、参加者でスモールグル

ープを作り、我が国の成長段階について、ルーブリックを評価し、国内ですで行われたデータと比較したところ、いずれも誕生段階であることが理解された。これにより、ルーブリックの成長段階に基づき、今我々がやるべきことが共有された。



次世代の野外教育について考えるーデジタル技術・AI・WEB3は野外教育とどう交わるか？

司会者・話題提供者：及川 未希生（盛岡大学短期大学部）

話題提供者：庄子 佳吾（桜の聖母短期大学）

このシンポジウムは、デジタル技術と野外教育がどう交わるか、その可能性を広げるためには何が必要かについて深く

考察する貴重な機会となりました。特に、新しいテクノロジーがもたらす変化をどう野外教育に取り込むか、それが教育

の質や子供たちの体験にどう影響するのかについての議論は非常に興味深く、今後の研究発展が期待されます。内容の一部を紹介します。

第一部では、デジタル技術と野外教育がどのように交錯するかについての基礎的な概念が紹介されました。具体的には、WEB3とその主要な知識について解説し、これらの技術が教育においてどのような新しい可能性を持つかが議論されました。また、デジタル技術が進展する中で、中央集権的なシステムから分散型のシステムへの移行の必要性、そしてそれが社会や教育にもたらす影響が指摘されました。

第二部では、デジタル技術と野外教育が具体的にどのような結びつくかの事例が紹介されました。Kahoot!とCanvaを

使った教育の実践例や、ブロックチェーンを活用した健康ヘルスケアアプリ「STEPN」の事例が取り上げられました。特にSTEPNは、野外活動を促進するだけでなく、運動不足の解消や新たな経済的価値としての可能性が示されました。



我が国の自然体験活動におけるデジタル技術活用の現状

企画者：甲斐 知彦（関西学院大学）

企画協力者：青木 康太郎（國學院大學）

竹内 靖子（桃山学院大学）

西垣 幸造（公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会・関西学院大学）

登壇者：下仲 健太（前文部科学省、現国立淡路青少年交流の家）

野口 利恵（株式会社浜銀総合研究所）

遠山 昂（国立阿蘇青少年交流の家）

2022年度に文部科学省による「自然体験活動におけるデジタル技術の活用に関する調査研究」が全国規模で実施されました。本自主企画シンポジウムは、その調査研究に実施者、調査研究員、事例紹介者として参画したメンバーで企画し、実施主体の立場から下仲健太氏（現国立淡路青少年交流の家）、調査を主導され、多くの団体のヒヤリングを実査された野口利恵氏（株式会社浜銀総合研究所）、大変興味深い事例をご紹介いただいた遠山昂氏（国立阿蘇青少年交流の家）にご登壇いただき、我が国における自然体験活動へのデジタル技術の活用状況をご参加いただいた皆さんと共有させていただきました。当日は、朝早くからの企画にも関わらず、多くの方にご参加いただき、活発な議論の場となりましたことに

感謝申し上げます。教育現場では、GIGAスクール構想など、急速なデジタル化が進んでいます。そんな社会における野外教育のあり方を考える上で本企画が何かの参考となれば幸いです。



メタ分析をやってみた！～その実際とポイント～

企画・話題提供：向後 佑香（筑波技術大学）

張本 文昭（沖縄県立芸術大学）

この自主企画は、『野外教育研究』第26巻に掲載されたレビュー論文の執筆が発端となっています。直線距離で約1,610km離れた大学（Google調べ）に所属する2人が、数え切れないくらいのメールを送受信させ、また数百の紙の研究論文を段ボールに入れて何度も往復させながら（時に筑波ワインやオリオンビールも同封）、約3年をかけて受理に至った論文です。苦労やハードルも数多くありましたが、2人の間では「メタ分析って、いいね！」という共通認識があり、だったら「学会のみんなにもノウハウを還元したいね！」という勢いで開催したのが今回の自主企画でありました。

当日はメタ分析の概要や当該論文の紹介を含めつつ、「2人がどのような手順・方法でこの研究に取り組み、実際に何をしたか」「どんなことに困り、どう解決したか」を中心に話を進めました。また、お伝えするうちに思い出すことがあったため、改めて説明を付け加えることが何度かあり、具体的な

メタ分析研究の進め方、共同研究の実際などは伝わったかなと思っています。いろんな動機で参加して頂いた20名弱のみなさんともディスカッションすることもできました。

当該論文や今回の自主企画をきっかけに、まだまだ少ないメタ分析研究が今後はより多く取り組まれていくことを願います。



◆ エクスカーション

第26回大会では、学会大会の前後に、エクスカーションを実施しました。全部で6コースを企画し、道央圏（北海道の中心部を表す名称）を中心に、森林、山岳、河川など、北海道の自然環境を満喫できるフィールドや、野外教育活動を展開する青少年教育施設、研究施設などでプログラムを展開しました。それぞれの企画にご参加いただいたみなさまからは、大自然あふれるフィールドで体験し、ご満足いただいたというお声を数多くいただきました。Aコース「北海道大学苫小牧研究林フィールド視察」の中村誠宏さん（基調講演講師）をはじめ技術職員のみなさま、Bコース「富良野リバーツアー」の加藤寿宏さんをはじめウッキーズのみなさま、C

コース「十勝岳ジオパークツアー」の青野範子さん（実行委員会シンポジウム講師）、Dコース「札幌定山溪リバーツアー」のフリルフスリフのみなさま、Eコース「登別ネイチャーセンター沢登り体験」の白川美穂さん、Fコース「洞爺湖有珠山ジオパークツアー」の能條歩さん、計画から実施に至るまで、たいへんお世話になりました。北海道のアウトドア・野外教育関係の連携の強さと大自然のフィールドのポテンシャルを最大限に感じる事ができたエクスカーションになったと思います。

報告者：山田 亮（北海道教育大学）



◆ 若手優秀発表賞

審査委員長：蓬郷 尚代（中央大学）

若手優秀発表賞は、若手研究者の野外教育に関する研究発表を奨励し、学会大会の活性化を図ることを目的として創設されました。北海道教育大学にて開催された日本野外教育学会第26回大会において選考が行われました。昨年は3題のエントリーでしたが、今年は11題が若手優秀発表賞のエントリーをおこない、コロナが落ち着いたことも一要因となったためか、若手研究者による研究活動が活発におこなわれている様子を感じることができました。若手研究者として設けられた会場は全てのセッションが審査対象の研究発表となり、いずれの研究も熱い議論が交わされ関心の高さが窺えました。

審査は、「研究のオリジナリティー」「有用性」「方法の妥当性」「発表技術」の4項目で評価されました。審査の結果、棟田雅也氏（鹿屋体育大学）の発表が審査委員から特に高い評価を受け、若手優秀発表賞を受賞されました。審査委員からは本研究を基盤とした今後の発展性も含めた期待が寄せられていました。次回大会も多くの若手研究者による発表があることを期待しています。

審査委員長：蓬郷尚代

審査委員：前田和司、千足耕一、野口和行

受賞者 棟田 雅也 氏（鹿屋体育大学）

発表演題 アウトドアスポーツツーリストにおける自然環境保全意識の先行要因と結果要因 —トレイルランニングイベント「TORESTRAIK HIRUZEN - SHINJO」の大会コンセプトの理解度、満足度、および行動意図に着目して—

（受賞コメント）

この度は、このような素晴らしい賞をいただき、誠にありがとうございます。例年に比べて選考対象者も多い中で受賞

できたことに喜びを感じると同時にホッとしました。選考者から「研究のオリジナリティーおよび有用性に関しての得点が特に高かった」との講評をいただくことができ、身に余る思いです。

この研究の目的は、アウトドアスポーツツーリストの大会コンセプトの理解度、満足度、および行動意図との関連性に着目し、自然環境保全意識の先行要因と結果要因を明らかにすることにありました。そこでトレイルランニングイベント「FORESTRALL HIRUZEN-SHINJO」の参加者を対象に調査・分析を行った結果、アウトドアスポーツツーリストの自然環境保全意識の構成概念を明らかにすることができました。また、自然環境保全意識の向上には大会コンセプトの理解度が影響を及ぼし、将来の行動にもつながることが分かりました。

今回、鹿屋体育大学の金久博昭学長にも受賞の報告をしたのですが、「こういったアプローチの仕方そのものが例としてはまだそんなに多くはないと思うので、とても面白い内容になっていると思います。我々が地域貢献としてイベントを行う際に、まさに大事なのが今回の受賞内容でもある『コンセプト』だと言えます。そのときそのときにベストな手法を使って可視化していく姿勢をこれからも大事にしてほしいです」と激励していただきました。

今後はエビデンスベースでアウトドアスポーツ事業が展開されると共に、アウトドアスポーツイベントが持続可能的に開催されていくためにも、参加者がただ参加をするだけでなく、参加する度に自然環境との「在り方」について意識を持ち、行動してもらえるような、「参加する人が増えるほど、自然が豊かになっていく未来」を生産者および消費者を含む全ての関係者でタッグを組み、見据えていくことができればと思っております。



◆ 参加者の感想

岩見沢で開催された日本野外教育学会に、初めて参加しました。自身の専門である生態学では、遺伝子から景観まで様々なスケールを扱うものの、各生物個体固有の応答は排除し、一般化された事象を探ります。これに対して、一人の人間の成長に、野外教育はどのようにアプローチするべきか、

日本野外教育学会の大会は北海道教育大学岩見沢校にて初夏を感じられる7月に開催された。季節柄の小雨の降る涼しい会場では、基調講演やプレゼンテーションに熱心に耳を傾ける姿が印象的でした。私の都合ではありますが、学会員でありながら学会大会に参加したことがありませんでした。初めての大会参加者として新鮮な心持で大会に参加し、大会組織に関わる方々や大会の運営を拝見させていただきました。

大会初心者である小生には人との出会いや交流が大きな収穫でありました。学会大会を通じて、新しいつながりや同じ野外教育の発展を目指す同志との関係を強化することができる場を提供してくれた大会運営に感謝をしております。

人生初の対面参加の学会でしたが、皆様の明るい挨拶と活発なコミュニケーションのおかげで、非常に充実した2日間を過ごすことができました。ここでは、私が本大会で得た些細な気づきについて、述べさせていただきます。

自分自身の自然に触れた経験を思い返してみると、そこに意識的な学びはなかったように思います。ただ「自然を大切にしたい」という漠然とした想いだけが、今もなお残っているのです。これは私の価値観であり、たとえ誰かが同じ体験をしたとしても、必ずしも構築される想いではないでしょう。自然体験がもたらすパワーは、「個人」に焦点を当てなくては検討し得ないと感じます。しかし、教育と

白川 勝信（共創資産研究所）

という議論は新鮮に映りました。いわば特異性を排除するのではなく、そこから観察を深めていく姿勢は、多様性を認めるこれからの社会に欠かせない分野だと思います。企画・運営いただいた実行委員のみなさまに感謝します。ありがとうございました。

小池 太（山梨学院大学）

個人的に大会で特に印象に残ったことは企画委員会シンポジウムのセッションでした。北海道の学校現場、地域、企業の視点から体験学習を掘り下げる。北海道でしかできない取り組みもあれば、自分の地域に持ち帰り実践できる活動などを知れたことは大きな成果でした。産官学が綿密に関わることで、多くのコミュニティが豊かになることを知りました。インクルーシブな人たちが作り上げる素敵な時間の共有の場であったと感じています。

大会から得たインスピレーションやアイデアに基づいて、産官学の連携を意識しながら山梨の地域にどのように貢献できるか考え、行動に移してみたいと思います。

三浦 万由子（日本大学大学院）

しての自然体験となれば話は違いますが。一定の教育目標を達成するための手段として自然体験が用いられた場合、組織的かつ計画的に教育のあり方を検討する必要があるでしょう。ここで「個人」が得たパワーというのは、野外教育研究として関与すべき範疇から突出してしまうと思います。

そのため、一人ひとりが「自分」の人生単位で自然体験について考える機会が求められるべきなのではないでしょうか。本大会で得たこの些細な気づきを、忘れずにいたいと思います。

日本野外教育学会 第7回論文賞の紹介と受賞者の声

表彰委員長 永井 将史（東京女子体育大学）

令和5年度、第7回論文賞（優秀論文賞および奨励賞）が発表されました。北海道教育大学で開催された第26回大会の総会の中で表彰式が行われましたが、本紙面にて、改めて表彰者をご紹介しますとともに、受賞者のコメントをお伝えいたします。

優秀論文賞は村越真さん（静岡大学）、奨励賞（35歳以下が受賞対象）は佐藤冬果さん（東京家政学院大学）他共同研究者4名と、小宮山咲希さん（静岡県立下田高等学校）他共同研究者3名に授与されました。

<優秀論文賞>

村越真

「自然環境での個別的リスクに対するリスクマネジメントの枠組みの提案」

（野外教育研究第25巻 2022年）

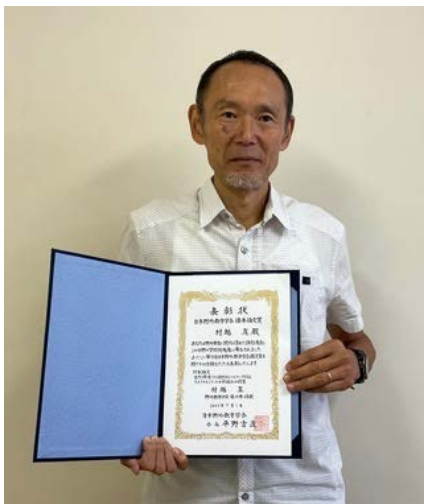
【選考理由】

野外教育において重要視されるリスクマネジメントについて、これまでの理論を整理しつつ、筆者らのこれまでの研究で得られた知見や熟達者たちの実践知によって裏付けられたCTD (Controllability analysis of Time-Dependent risk) 分析を提案しました。特にリスク源、リスク増大要因、兆候、リスクの急襲性・漸進性、オフサイト・オンサイトなどの意味や関係をステップごとに明らかにし、リスクマネジメントの手順を示した点に高い独自性が認められました。

また、野外教育分野におけるリスクマネジメント研究の更なる発展の基点となり得る研究であり、波及効果の大きさも高く評価されました。

【受賞者の声】

この度は、名誉ある賞を戴き、誠に光栄です。本研究の出発点は、1999年玄倉川水難事故の報に接し、人はなぜ不適切なリスク認知をしてしまうのかと感じたことでした。当時筑波大学の橋直隆さんの協力を得て、KYTによる野外場面でのリスク知覚研究からスタートしました。これを机上練習化する過程で、「止めさせたいかどうか」でリスク評定させる方法を思いつきました。その中に「今止めさせる必要はないが、必要になったら止めさせる」という評定項目を無自覚に入れました。ではそれはいつか？ 冒険的な野外教育ではそこが問題です。実践経験者なら、言語化できなくても、その場面での確に止められるでしょう。後に、直接的に関係ない高所登山家の質的研究から、「制御性」という答えの一端を得たことが、受賞論文に結びつきました。投稿時に手応えはありました。査読がADであった時には、更に本論文のポテンシャルを感じました。現在、幼稚園の遊びから南極まで、個人的なリスク対応の汎用理論への拡張を続けています。若い方にも、身近な疑問と直感を大切に、一方でそれを実証する地道な努力を続け、学会と社会に貢献していただくことを願い、筆を置きます。



（左から、村越さん、佐藤さん、小宮山さん）

<奨励賞>

佐藤冬果 大友あかね 小宮山咲希 金谷麻理子
坂本昭裕

「野外運動 (ASE) を教材とした大学体育授業による
Self-authorship 育成の試み」

(野外教育研究第 25 巻 2022 年)

【選考理由】

本研究は、野外教育プログラムを教材として用いた大学授業の実践が、大学生の SA (Self-authorship : 個人が社会との関係性の中から主体的に自己の世界を築いていく能力) の成長過程に与える影響とその要因について詳細に研究されています。研究手法として、定量的分析ならびに定性的分析、双方の手法を用いた混合分析法を用いることで信頼に足る結果を得ることに成功しており、その新規性と独自性が高く評価されました。

野外教育プログラムによる SA の育成の可能性を示し、野外教育の新たな可能性を示した価値ある研究であると言えます。

【受賞者の声 : 研究代表者】

この度は奨励賞を頂戴し、誠にありがとうございます。畏

<奨励賞>

小宮山咲希 大友あかね 佐藤冬果 坂本昭裕

「青少年教育施設における自然体験活動の指導を経験した教員の指導観に関する研究」

(野外教育研究第 25 巻 2022 年)

【選考理由】

本研究は、青少年教育施設における自然体験活動の指導経験が、教員の子どもに対する捉え方や、学習活動、指導方法に関する考えに影響することを明らかにしており、施設での指導経験が、教員が自らの指導を振り返り、学校教育について再考する契機となることを示しています。これらの結果は、教員が青少年教育施設に配属されることの意義を明確に示しており、今後の人事交流や施設での指導の在り方に関して示唆に富む貴重な知見が得られています。

青少年教育施設における指導経験が教員の指導観に及ぼす影響について研究した数少ない研究論文の一つであり、その独自性も高く評価されました。

【受賞者の声 : 研究代表者】

この度は、日本野外教育学会論文奨励賞を頂き誠にありが

れ多くも、とても嬉しく思います。選考や査読をご担当頂いた先生方、そして御指導下さった坂本昭裕先生をはじめ、手を取り合い共に研究生活を送った共著者の先生方に心より感謝申し上げます。

この論文は、博士論文の一部をまとめたものです。大学体育に関する専攻への進学を契機に、大学教育の枠組みの中で主張できる野外教育の強みとは何かを考え、設定したテーマでした。Self-authorship という聞きなれない概念をお借りしていることもあり、冗長で分かりにくさの残る論文になってしまいましたが、野外活動 (ASE) の中で生じる心の動きやそれを取り巻く環境構造、そして体験に対する学生達の意味づけが、野外教育を知らない方々にも伝わるようにという思いで取り組みました。博論全体でみると、理論研究や尺度づくりを経て、実際の授業実践の成果は？という核心にあたる部分でしたので、今回評価頂いたことは大きな励みとなりました。

とはいえ、研究の成果を現在の担当授業に活かすことはまだまだ出来ておりません。研究と教育の循環、そして更に研究を深めることを今後の課題に精進して参ります。引き続き、宜しくお願い致します。

とうございます。

この論文は、私の修士論文の一部になります。高等学校の教員を休職して大学院に入学し、学校教育とは枠組みの異なる野外教育に触れたことが契機となり、教員の指導観について研究することとなりました。論文の作成に当たり、丁寧に指導くださいました筑波大学の坂本昭裕先生をはじめ、貴重な示唆をくださった先生方、調査にご協力くださった方々に心より感謝申し上げます。

研究の内容については、指導観の構成内容や調査対象者の属性など今後の課題は多く残りますが、学校現場を離れて自然体験活動の指導を経験された方々のお話を伺うことができたことは、同様の経験をした私にとって楽しい時間となりました。

大学院修了後は高等学校の教員に復職しました。学校教育の中いかに野外教育を取り入れるか、また、いかに野外教育の枠組みを通して学校教育を見るか、試行錯誤しながら日々を過ごしております。目の前にいる生徒一人ひとりにとってよりよい教育ができるよう、野外教育を学んだ者として一層精進していきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

第6回 日本野外教育学会 研究集会 開催のご案内

企画委員長 野口 和行 (慶應義塾大学)
実行委員長 伊原 久美子 (大阪体育大学)
実行委員 青木 康太朗 (國學院大学) 高橋 徹 (岡山大学)、
張本 文昭 (沖縄県立芸術大学) 吉松 梓 (明治大学)

日本野外教育学会では、学会員の研究力の向上、学会員同士の研究に関わる情報交換の活性化を目的として2018年度より「研究集会」を継続して開催してきました。今年度は時期を少し早めて12月に大阪にて開催いたします。オンライン配信も行いますので、遠隔参加も可能です。多くの会員の皆さまのご参加をお待ちしております。

【日程】 2023年12月16日(土) 10:00-16:00

【方法】 対面参加、オンライン参加 (zoom)、アーカイブ視聴

【場所】 大阪体育大学同窓会館 (アネックス)

大阪市北区天満3丁目10-16 (大阪天満宮駅[8号出入口]徒歩4分)

【プログラム】

10:00-12:00 午前の部

タイトル: 青少年教育施設の経済的な効果について考える

講師: 横田 匡俊 先生 (日本体育大学)

近年、青少年教育施設の閉鎖等が問題となり、その価値が問われています。地域の経済循環を生み出すことで持続可能な施設運営を目指すことが大切であるという視点に立ち、地域付加価値創造分析をご紹介します。

12:00-13:00 昼休み

13:00-16:00 午後の部

タイトル: 複線径路等至性アプローチ (TEA) の実際

講師: サトウ タツヤ 先生 (立命館大学)

複線径路等至性アプローチ (TEA) は、時間経過とともにある人生径路や人間発達の多様性・複線性を大切にしている人間観を有した質的研究法です。この講習会では基本的な考え方を学び、実際の研究の進め方について体験的に学びます。

【参加費】 (参加形態にかかわらず一律の金額)

会 員: 一般会員 3,000 円、学生会員 1,000 円、団体・賛助・名誉会員 3,000 円

非会員: 一般 4,000 円、学生 1,000 円

【申込方法・参加費納入方法】

1) まず、下記フォームより参加のお申込を頂きます。(12月9日締切)

<https://forms.gle/WrZHbxmynybX7ya6>

2) その後、下記 peatix サイトより参加費をお支払い頂きます。(12月9日締切)

<https://joes6thresearchmeet.peatix.com/view>

3) 上記 1)2)の両方が確認できた方へ事前案内や zoom のアクセス情報等を連絡します。

【問い合わせ先】

伊原久美子(大阪体育大学) ihara@ouhs.ac.jp *問い合わせはメールでお願いします。

10th International Outdoor Education Research Conference

参加申込みのお知らせ

高野 孝子（早稲田大学）・岡田 成弘（東海大学）

第10回国際野外教育研究大会（10th International Outdoor Education Research Conference, IOERC10）が2024年3月に日本で開催され、世界中の野外教育関係者が日本に集まります。日本を含めて世界中から180件もの研究発表が予定されています。また、IOERCは、英語が第一言語ではない人も多く、英語が苦手な人にとっても参加しやすい国際カンファレンスです。

参加申込みは既に始まっており、Early Bird（早期割引）は11月末までとなっています。申込みはお早めをお願いします。このカンファレンスは、一見すると参加費が高いように思われるかもしれませんが、海外で開催されるカンファレンスは参加費だけで1日1万円程度することもあることを考えると、今回の大会はかなり参加しやすいと言えるでしょう。是非、多くの学会員の方にもご参加いただければと思います。

以下にカンファレンスの概要を紹介しますが、詳細については、Webページをご参照ください（<https://ioerc10.org/>）。

【日程】 2024年3月2日（土）～8日（金）

【場所】 国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）

【プログラム】

	3月2日(土) 3月3日(日)	3月4日(月)	3月5日(火)	3月6日(水)	3月7日(木)	3月8日(金)
午前			研究発表	研究発表	研究発表	研究発表
午後	フィールド トリップ	受付 オープニング	研究発表 ポスター発表/ 分科会	エクスカー ション	研究発表	クロージング
夜		ウェルカム パーティー	東京ナイトツアー (任意参加)		フェアウェル パーティー	

【参加費】

	Early Bird(早期割) 11月末日まで	通常価格 12月以降
全日程参加(3/4-8) ※パーティー代含む	36,000円	46,000円
日帰り参加(1日毎)	5,000円	7,000円
ウェルカムパーティー	10,000円	
フェアウェルパーティー	10,000円	

- ・パーティー代が含まれる全日程参加がお得です。
- ・パーティー以外の食事代は含まれていません。
- ・フィールドトリップには別途参加費がかかります

※オリンピックセンターでの宿泊を希望する人は、Web申込みの際に1泊3,700円/泊で申し込むことができます。

【申込方法・参加費納入方法】

専用申込みサイトからお願いします。参加費支払いも同時に行います。

<https://checkout.square.site/merchant/MLRAFQVH8Q0BY/checkout/UEHD34NEN7N3RJVKV2GK3ZBGR>

【問い合わせ】

実行委員長 高野孝子（早稲田大学） takanot@waseda.jp 岡田成弘（東海大学） ms-okada@tsc.u-tokai.ac.jp

書籍紹介

渡邊 仁 (筑波大学)

「キャンプセラピーの実践 –発達障碍児の自己形成支援–」

坂本昭裕 (2023) 道和書院

昨今、空前のアウトドアブームの中で、世代を問わず多くの方がキャンプに親しんでいます。キャンプ自体は、レクリエーションとしてだけでなく、従来から教育プログラムとしても活用されてきました。近年では、本書のような心理治療的なプログラムとしての「キャンプセラピー」に注目が集まっています。

本書で取り扱うキャンプセラピーとは、「心理学的諸理論と技法を活用しながら、キャンプにおける生活体験や冒険プログラムを通じて、その人の訴える問題の軽減や発展に向けて支援する集団療法」と著者は位置づけており、本書では、キャンプセラピーの概論から軽度発達障碍児に対するキャンプセラピーの実践、その効果検証、および実践における課題などが示されています。

実は、我が国では発達障碍児のみを対象としたキャンプセラピーの知見は少なく、本書で実践されたプログラム自体も非常に興味深いものです。また、効果検証に関しては、発達障碍児の客体的自己（自己概念）や社会的スキル等の変化の統計的分析のみならず、彼らの主体的自己（自我機能）の変化に関して風景構成法（LMT; Landscape Montage Technique）を通して得られたデータを、量的・質的の両アプローチから独創的な分析がされています。特に、本書の核心である質的研究では、参加した発達障碍児の事例に関して、彼ら自身がどのようにキャンプ体験を意味づけたかが丁寧に検証されており、クライアント中心療法を創始したロジャーズの「パーソン・センタード・アプローチ」の精神が貫かれています。

上述した内容以外には、アメリカにおけるウィルダネスセラピーの系譜のレビューからは、アウトドア先進大国の歴史的な厚みを感じさせられます。また最終章には、キャンプカウンセラーの課題について5つの言及があり、実践的示唆に富んだ内容となっています。

本書は、本学会理事長の坂本昭裕先生（筑波大学）が、2022年に筑波大学大学院に提出された学位論文を基に上

梓されたものです。一連のキャンプセラピーの実践は、本学会元会長の故・飯田稔先生等の取り組みを萌芽として、坂本先生によって結実した背景があります。本書は、我が国の野外教育の学術的発展および実践に寄与するものであり、是非会員の皆様に一読いただきたいと思えます。

目次

- 第1部 キャンプセラピーとは何か
 - 第1章 発達障碍児への支援とキャンプセラピー
 - 第2章 キャンプセラピーとは何か
 - 第3章 キャンプセラピーの効果に関する研究
- 第2部 統計的研究
 - 第4章 心理的課題を抱える生徒を対象としたキャンプセラピー
 - 第5章 自己概念、被受容感、社会的スキル
 - 第6章 自我機能に及ぼす効果
- 第3部 質的研究
 - 第7章 事例A 場面緘黙のため人前で発言できない ASD 児
 - 第8章 事例B 自分本位にふるまう ADHD 児
 - 第9章 事例C からかわれるとカッと become 暴力をふるってしまう ADHD 児
 - 第10章 キャンプセラピー実践の課題

(A5 判並製 248 頁)





日本野外教育学会